

[特集] 青葉山の生物相

青葉山市有林（仙台市）の植物相（2）

移川 仁*・溝田浩二**

Flora of the Aobayama Area, Sendai City, Northeastern Japan (2)

Jin UTSUSHIKAWA and Koji MIZOTA

要旨：青葉山市有林（仙台市）には、100万都市の市街地に隣接しているとは思えぬほど多様性に富んだ動植物が生息している。この森を環境教育の観点から捉え、フィールドミュージアムとして積極的に活用していくためには動植物の継続的な生態調査が欠かせない。1994年～2005年の11年余、青葉山市有林の植物相に関する継続的な調査を行なった結果、138科987種の植物が確認された。

キーワード：青葉山市有林、植物相、フィールドミュージアム、生物多様性、環境教育

3. 結果と考察（前報からのつづき）

2) 確認された主な植物種

【マツ科 Pinaceae】

◆モミ *Abies firma*

亜高山～平地に広く分布する日本特産の常緑高木。本県が北限に近く、分布も限られているが、青葉山では広瀬川沿いなどに良く発達した天然林が見られる。当林の極生相を形成する重要樹種である。

【カバノキ科 Betulaceae】

◆ケヤマハンノキ *Alnus hirsuta*

落葉高木。崩壊地や法面などで他に先駆けて生育する開拓植物（パイオニアプランツ）の代表。根粒菌と共生して空気中の窒素を固定し、痩せた土壌を肥やす力を持つ。春先に枝先から雄花穂を沢山垂らし良く目立つ。青葉山では、湿性地にハンノキも群生する。

【ブナ科 Fagaceae】

◆ブナ *Fagus crenata*

東北の山地林の代表的落葉高木。低山にはないと思われがちだが、青葉山にも自生し、小林も作る。樹皮が白く美しい。古名タチソバ、ソバノキと言われるように食料としてはもちろん、灯油や建材などとして広

く利用されてきた。戦後の大量伐採などで激減したが、近年は、ブナ林そのものの豊かさや緑のダムとしての機能などが見直されつつある。別名シロブナ、本ブナ。

◆イヌブナ *Fagus japonica*

山地に生える落葉高木。一般にブナより低山に分布し、青葉山にも数多く自生している。ブナと異なり、果実に長い柄がある。ブナ等と共に当林の極相林を形成する。別名黒ブナ。

◆ミズナラ *Quercus cuspidata*

山地に生える落葉高木。主に奥山に分布するが、青葉山にも数多く自生している。本種も、青葉山市有林の極相林を形成する樹種の一つ。名は、材に水分を多く含むことから付けられた。別名オオナラ。

◆コナラ *Quercus serrata*

山地に生える落葉高木。青葉山では最も多い樹種で、所謂二次林の主役となっている。5月頃黄褐色の穂花を垂らす。名は、ミズナラ（オオナラ）に比べて樹高、葉、果実共に小さいことから付けられた。

【クワ科 Moraceae】

◆カラハナソウ *Humulus lupulus var. cordifolius*

山地に生える雌雄異株の蔓性多年草。8～9月に咲く雄花は淡黄色で円錐状、雌花は淡緑色で鞠状。セイ

*青葉山の緑を守る会、**宮城教育大学環境教育実践研究センター

ヨウカラハナソウはこの栽培種で、日本産ビール第一号は本種のホップから作られた。名の由来は、果穂を模様に使われる花形（唐草）に見立てたもの。別名キツネノチョウチン。

【キンポウゲ科 Ranunculaceae】

◆カザグルマ *Clematis patens*

林縁等に生える蔓性低木。青葉山では、6月に白く大きな花を咲かせる。近年、盗掘などにより激減している。環境庁レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定されている。

◆セリバオウレン *Coptis japonica* var. *dissecta*

ヒノキやスギの湿った林床に群生する多年草。雌雄異株。青葉山では、マンサクに続いて3月初めには白い星屑状の小花が咲き出す。根が黄色く、葉がセリに似るのが名の由来。根茎は胃腸薬等に利用される。

【メギ科 Berberidaceae】

◆イカリソウ *Epimedium grandiflorum* var. *thunbergianum*

山地の林床に生える多年草。青葉山に多く自生し、4～5月に、紅紫色の花を、名の由来の「碓」のように下げる。中国の誇示にあるように、強壯剤として知られるが、有毒成分も含まれるので、無闇な摂取は禁物である。種子にはアリが好む付属体があり、広く分散される。仙台では、奥羽山系にキバナイカリソウも分布する。

【マタタビ科 Actinidiaceae】

◆サルナシ *Actinidia arguta*

山地に生える雌雄異株の落葉蔓植物。6～7月に白色花を下向きにつける。10月頃に熟す果実はコクワとも呼ばれ、甘く美味。名は、サルが好むナシの意。別名シラクチヅルも猿口蔓（マシラクチヅル）の転訛と言われる。キウイは、近似種のシナサルナシ（中国原産／別名オニマタタビ）の改良種である。

◆マタタビ *Actinidia polygama*

山地に生える落葉蔓植物。6～7月に乳白色の花を下げるが、花期に合わせるように葉が白くなり、ポリネーターである昆虫類を呼び寄せるのだという。果実

はネコ科動物を興奮させる物質を含むが、人間にとっても万病薬として利用されてきた。名はアイヌ語に由来。別名ナツウメ（花が梅に似ているから）。

【スミレ科 Violaceae】

◆マキノスミレ *Viola violacea* var. *makinoi*

山地に生える無茎性多年草。青葉山では4～5月に淡赤紫色の花を咲かせる。シハイスミレの変種。名は、植物学者牧野富太郎に因む。

◆ナガハシスミレ *Viola rostrata* var. *japonica*

山地に生える有茎性多年草。青葉山では4～5月に淡紫色の花を咲かせる。分布が沿日本海型である上、全国的に稀であるが、青葉山市有林では最も普通に見られるスミレである。

【ツリフネソウ科 Balseminaceae】

◆ツリフネソウ *Impatiens textori*

山野の湿地に生える多年草。青葉山では溪流沿いなどに生育し、7～9月に紅紫色の花を咲かせる。名は、花形が船を吊り下げたように見えることに由来する。青葉山市有林では、黄花のキツリフネも自生している。

【ユキノシタ科 Saxifragaceae】

◆ダイモンジソウ *Saxifraga fortunei* var. *mutabilis*

山地の湿った岩崖に生える多年草。青葉山にも群生するが、近年、盗掘などにより激減している。名の由来のように、10月初旬に「大」の字に似た花を咲かせる。

【マンサク科 Hamamelidaceae】

◆マンサク *Hamamelis japonica*

山地に生える落葉低木。青葉山では2月中旬～3月にかけて、他に先駆けて細いリボン状黄花を咲かせる。名の由来は、「満ち咲く」から、「まず咲く」からなど諸説ある。

【バラ科 Rosaceae】

◆モミジイチゴ *Rubus palmatus* var. *coptophyllus*

山野に生える落葉低木。代表的な木苺であり、青葉山にも多い。名の由来は、葉がもみじに似ていること

による。ジャムなどとして人間にも食されるが、野鳥やテンなどの獣にも好まれ、糞による種子分散を行う。別名キイチゴ（木苺、黄苺の意）。

【マメ科 Leguminosae】

◆ツクシハギ *Lespedeza homoloba*

山野に生える落葉低木。青葉山で最も多く見られる萩で、8～10月に薄紅色の花を多数咲かせる。宮城野萩に対して仙台山萩と呼ばれる。

【カエデ科 Aceraceae】

◆メグスリノキ *Acer nikoense*

落葉高木で青葉山に多い。5～6月に白色小花をつけるが、秋のバラ色の紅葉は特に美しい。名は、樹皮を洗顔に使ったことによる。宮城県レッドデータブックで準絶滅危惧（NT）に指定されている。別名チョウジャノキ、ミツバカエデ。

【ブドウ科 Vitaceae】

◆ノブドウ *Ampelopsis brevipedunculata* var. *heterophylla*

山野に生える落葉性蔓植物。6～7月に淡緑色の花をつける。果実は、タマバエなどが卵を産み付けると虫こぶになり、緑→白→青→赤紫などに変色して美しい。薬効があって生薬として利用される。青葉山には、葉が深裂するキレハノブドウも多い。

【イワウメ科 Diapensiaceae】

◆イワウチワ *Shortia uniflora* var. *kantoensis*

常緑の多年草。青葉山では、北斜面の崖地に群生し、4月初旬、淡紅色の花をうつむき加減に咲かせる。名の由来は、岩地に生え、葉が団扇に似ることによる。別名イワザクラ。主として深山に生育する希少種。宮城県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定されている。

【イチヤクソウ科 Pyrolaceae】

◆ギンリョウソウ *Monotropastrum humile*

山地のやや湿った林床に生える多年草。青葉山では5～8月、薄暗い森の木陰で透き通る銀白色の茎葉に

蒼白い花を下向きにつける。種子植物だが葉緑素がないため、栄養分の全てを根と共生する菌類からもらっている腐生植物の一つ。近似種のシヤクジョウソウも自生している。

【ツツジ科 Ericaceae】

◆サラサドウダン *Enkianthus campanulatus*

山地に生える落葉低木。青葉山では明るいコナラ林下や尾根筋に自生し、5～6月に淡紅色で紅色の筋のある鐘状花を多数下げる。近年、盗掘などにより激減している。

◆アブラツツジ *Enkianthus subsessilis*

山地に生える落葉低木。青葉山ではコナラ林床などに多数自生し、6月頃に鈴状白花を多数下げる。宮城県レッドデータブックで要注目種に指定されている。

◆トウゴクミツバツツジ *Rhododendron semibarbatum*

山地に生える落葉低木。青葉山では尾根筋などに比較的多く自生し、5月頃に紫色の花を咲かせる。全国的に分布が限られ、盗掘などにより減少している。宮城県レッドデータブックで準絶滅危惧（NT）に指定されている。

【エゴノキ科 Styracaceae】

◆エゴノキ *Styrax japonica*

山野に生える落葉小高木。青葉山では、5～6月に白い小花を沢山つけ、落ちた後は白い絨毯を作る。果肉が有毒で口にすると「エゴイ」ことが名の由来だが、ヤマガラは好んで食べる。果実は魚捕りや洗剤としても利用された。別名チシャノキ、ズサノキ。

【リンドウ科 Gentianaceae】

◆リンドウ *Gentiana scabra* var. *buergeri*

山野に生える多年草。青葉山では9～10月に、明るい林床や草地で青紫色の花を咲かせる。近年、盗掘などにより激減している。宮城県レッドデータブックで準絶滅危惧（NT）に指定されている。

【ムラサキ科 Boraginaceae】

◆ルリソウ *Omphalodes krameri*

林床に生える多年草。青葉山では4月末～5月に、淡紅色から、名の由来の瑠璃色に変化する小花を開く。ヨーロッパ原産のワスレナグサの近似種。かつてはどこの森でも見られたが、開発等により激減。宮城県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定されている。

【クマツヅラ科 Verbenaceae】

◆ヤブムラサキ *Callicarpa mollis*

山野に生える落葉低木。青葉山では林縁などに数多く自生し、7～8月に淡紫色の小花を多数つけ、10～11月には赤紫の実が熟す。本県が北限地。宮城県レッドデータブックで要注目種に指定されている。

◆クサギ *Clerodendrum trichotomum*

山野に生える小高木。8～9月に枝先に長い花糸が特徴的な白花を咲かせる。果実は紺碧色で萼は赤紫色でよく目立つ。名の由来は、葉を揉むと臭いからだというが、ゴマのような香りがする。若葉が山菜として食されるほか、古来より草木染として染色に利用されてきた。伐採地などでいち早く芽を出し、蔓延る逞しさもある。

【シソ科 Labiatae】

◆ウツボグサ *Prunella vulgaris* subsp. *asiatica*

山野に生える多年草。青葉山では、6～8月に紫色の花を咲かせる。名の由来は、花を、矢を入れる武器「鞆」に見立てたという。別名カコソウ（夏枯草／直立したまま枯れるため）、スイバナ（花を吸うと甘い）など。薬草として利尿、消炎などにも利用される。

◆キバナアキギリ *Salvia nipponica*

山地に生える多年草。青葉山では森のそこここに群落を作り、8～10月にレモン色の花を咲かせる。花の形は学名（日本のサルビアの意）通りサルビアにも、名の由来（黄花の秋桐）でもあるキリの花にも似る。別名コトジソウは葉形を「琴柱」に準えたもの。茎葉が倒れて土と接するとそこから発根する。

【ゴマノハグサ科 Scrophulariaceae】

◆ママコナ *Melampyrum roseum* var. *japonicum*

半寄生の一年草。青葉山では、宮城教育大学男子寮

の東側の乾いた尾根道などに群生する。6～8月に紅紫色の花を咲かせる。ママコナ（飯子菜）の名は、花の中の白い突起や若い種子を米粒に見立てたもの。種子にはアリの好む脂肪体があり、運ばれて種が広められるアリ植物の一つ。

【スイカズラ科 Caprifoliaceae】

◆オトコヨウゾメ *Viburnum phlebotrichum*

山地に生える落葉低木。青葉山では明るい林下に数多く自生し、5月頃に赤みを帯びた白色の花を咲かせる。本県が北限。宮城県レッドデータブックで要注目種に指定されている。

【レンプクソウ科 Adoxaceae】

◆レンプクソウ *Adoxa moschatellina*

林内に生える多年草。青葉山では広瀬川沿いの湿った林床などに群生し、4月頃に黄緑色の小花を咲かせる。産地が極限され、宮城県レッドデータブックで準絶滅危惧（NT）に指定されている。

【キキョウ科 Campanulaceae】

◆サワギキョウ *Lobelia sessilifolia*

山野の湿地に生える多年草。青葉山では湿地に小群落を作り、9月に濃紫色の花を多数咲かせる。近年、盗掘などにより激減している。宮城県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定されている。

◆キキョウ *Platycodon grandiflorum*

山地の日当たりの良い草原に生える多年草。青葉山では9月頃、草地の縁などに青紫色の花を咲かせる。近年、盗掘などにより激減している。環境庁レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類（VU）に指定されている。

【キク科 Compositae】

◆シロヨメナ *Aster ageratoides* subsp. *leiophyllus*

山野の林下に生える多年草。青葉山では紅葉にはまだ早い仄暗い林床に白花を咲かせる。他の野菊に比べて花柄が細く弱げに見えるが、大群落を作る力強さを兼ね持つ。名の由来は白い嫁菜で、嫁菜は婿菜（シラヤマギク）に対してつけられた。

◆カシワバハグマ *Pertya robusta*

山地の樹陰に生える多年草。青葉山では10月頃、コナラ林床に穂状白化を咲かせる。宮城県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類(VU)に指定されている。

◆フキ *Petasites japonicus*

山野に生える雌雄異株の多年草。茎葉は広く食用とされるが、早春に顔を出すフキノトウ(仙台ではバツケ/アイヌ語に由来)は特に美味で、白い雌花より黄白色の雄花の方がうまいともいわれる。有毒成分も含まれるので多食は禁物である。

◆センダイトウヒレン

Saussurea nipponica subsp. *sendaica*

オオダイトウヒレンの変種で、関東以北に分布。青葉山では、9月下旬に淡紅紫色の頭花を散房状に多数つける。名のトウは塔のような姿から、ヒレンは中国の想像上の鳥、飛廉からつけられた。仙台の名のつく数少ない花の一つ。

【ユリ科 Liliaceae】

◆スズラン *Convallaria keiskei*

山地や高原の草地に生える多年草。青葉山ではコナラ林床などに小群落を作り、5月頃鐘状の白色小花を総状につける。盗掘が絶えず、激減している。宮城県レッドデータブックで要注目種に指定されている。

◆チゴユリ *Disporum smilacinum*

林床に生える多年草。青葉山では4~5月に茎先に白い小花を下向きにつける。稚児に似ているからとの名の由来どおり、小さく愛らしいが、根を伸ばして大群落を作る強さを兼ね持つ。青葉山では至る所で見られるが、関東、関西では激減している。

◆カタクリ *Erythronium japonicum*

山地の林床に生える多年草。青葉山では4月中旬、至る所に赤紫の絨毯を敷き詰めたように咲き乱れ、春の女神ヒメギフチョウも訪花する。花を咲かせるまで7~9年もかかる。根茎は昔、片栗粉として用いられた。名の由来は、花の様子が「傾く籠」に似ていることから古名「カタカゴ」となり、それにユリがついたものが詰まったとの説が有力。青葉山の自然度の高さの象徴である。

◆ショウジョウバカマ *Heloniopsis orientalis*

山地の林床に生える多年草。4月頃花茎を伸ばし、

赤紫の花を四方に開かせる。青葉山には、斜面を覆うほどの見事な群落もある。種子繁殖のほか、葉先から子株を出して栄養繁殖も行う。名の由来は、赤い花を中国の想像上の怪獣「猩猩」の顔に、ロゼット葉をその袴に見立てた。

◆ゼンテイカ (=ニッコウキスゲ)

Hemerocallis dumortieri var. *esculenta*

山地の草原などに群生する多年草。尾瀬など高山のものが有名だが、青葉山でも林中に小群落が見られる。学名通り、一つの花は短命(1~2日)だが、群落としては6~8月の一ヶ月以上は咲き続ける。名の由来は不明だが、別名ニッコウキスゲは、日光に多いスゲに似た黄花の意。

◆クルマユリ *Lilium medeoloides*

主として亜高山の草原に生える多年草。低山である青葉山でも、8月の真夏の森に赤橙色の花を下向きに咲かせる。かつてはあちこちに小群落を作っていたが、盗掘などにより激減している。名の由来は、輪生する葉の様子を車に準えたことによる。別名ワスレグサ。

◆マイヅルソウ *Maianthemum dilatatum*

山野の林内に生える多年草。主に亜高山~奥山に生育するが、青葉山でも各所に群生し、5~6月に穂状の白色小花を咲かせる。名は、葉と花の様子を舞う鶴にたとえた。

◆キチジョウソウ *Reineckea carnea*

主として暖地の林内に生える常緑多年草。青葉山ではアカマツ林床に数株確認され、10月頃に淡紅紫色の花を穂状につける。本県が太平洋側北限地。盗掘などにより減少し、宮城県レッドデータブックで要注目種に指定されている。

◆ヤマジノホトトギス *Tricyrtis affinis*

山地に生える多年草。青葉山では、ヒノキやスギの林下に多く、8~10月に薄紫の花を咲かせる。名は、山路に咲き、花卉の赤紫色の斑点をホトトギスの胸の模様に見立てたという。青葉山市有林では、黄花のタマガワホトトギスも自生。

【サトイモ科 Araceae】

◆マムシグサ *Arisaema serratum*

山林の樹陰に生える多年草。青葉山では5~6月に

緑色または紫色の仏炎苞をつける。雌雄異株だが、環境などによって性転換する。青葉山市有林には同属のウラシマソウも自生する。

【アヤメ科 Iridaceae】

◆ヒメシヤガ *Iris gracilipes*

山地のやや乾いた場所に生える多年草。5月中旬、尾根筋や斜面の林下などに淡青紫色の花をつける。青葉山には多いが、環境庁と宮城県のレッドデータブックで準絶滅危惧 (NT) に指定されている。万葉集にある「花勝見」はこの花との説もある。カッコウの鳴く頃に咲くのでカッコバナなどとも呼ばれている。

【ラン科 Orchidaceae】

◆キンセイラン *Calanthe nipponica*

深山の林縁などに生える多年草。青葉山では、6～7月、ヒノキ林床などに淡黄緑色の花を咲かせる。近年、盗掘などにより激滅している。環境庁レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されている。

◆ギンラン *Cephalanthera erecta*

山野の林内に生える多年草。青葉山では比較的多く見られ、4～5月、各林床に白色の花を咲かせる。近年、盗掘などにより激滅している。宮城県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されている。

◆ユウシュンラン

Cephalanthera erecta var. *subaphylla*

山野の林内に生える多年草。青葉山では比較的多く見られ、5～6月、各林床に白色小花を咲かせる。盗掘が絶えず、群生地が年々消えている。環境庁レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されている。

◆キンラン *Cephalanthera flacata*

山野の林内に生える多年草。青葉山では5～6月、アカマツ林床などで鮮黄色の花を咲かせる。盗掘が絶えない希少種。宮城県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN) に指定されている。

◆ササバギンラン *Cephalanthera longibracteata*

山野の林内に生える多年草。青葉山では5～6月、各林床に白色の花を咲かせる。ギンランより少ない。近年、盗掘などにより激滅している。宮城県レッド

データブックで絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されている。

◆シュンラン *Cymbidium goeringii*

山野の林内に生える常緑の多年草。青葉山では4～5月、各林床に黄白色の花を咲かせる。比較的数多く見られるが、盗掘が絶えることがなく激滅し続けている。別名ホクロ、ジジババ。

◆コアツモリソウ *Cypripedium debile*

山野の林内に生える多年草。5～6月に袋状の花を咲かせる。青葉山ではヒノキ林縁などで確認されている。近年、盗掘などにより激滅している。環境庁レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されている。

◆クマガイソウ *Cypripedium japonicum*

山野の林内に生える多年草。青葉山では5月頃、ヒノキ林床数ヶ所に袋状の大花を咲かせる。近年、盗掘などにより激滅している。環境庁レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されている。

◆アツモリソウ

Cypripedium macranthum var. *speciosum*

山地の草原や疎林に生える多年草。5～7月に袋状の大花を咲かせる。青葉山では広瀬川沿いの斜面で確認されている。近年、盗掘などにより激滅している。環境庁レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されている。

◆カキラン *Epipactis thunbergii*

山野の日当たりの良い湿地に生える多年草。青葉山では7月頃、小湿地で黄褐色の花を咲かせる。近年、盗掘などにより激滅している。宮城県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されている。

◆ノビネチドリ *Gymnadenia camtschatica*

山地の林床に生える多年草。青葉山では5～6月、広瀬川沿いの崖地などで淡紅紫色の穂状花を咲かせる。近年、盗掘などにより激滅している。宮城県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されている。

◆サギソウ *Habenaria radiata*

山野の日当たりの良い湿地に生える多年草。青葉山では8月、小湿地で白色の花を咲かせる。近年、盗掘などにより激滅している。環境庁レッドデータブック

で絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されている。

◆ヒメノヤガラ *Hetaeria sikokiana*

主に常緑林床に生える腐生植物。青葉山では8月頃、コナラ林床などで淡黄褐色の花を咲かせるが、近年、激減している。宮城県レッドデータブックで絶滅危惧Ⅱ類 (VU) に指定されている。

(3) 青葉山の自生植物の希少種について

青葉山市有林で確認された植物種の中で、環境庁レッドデータブックおよび宮城県レッドデータブックに記載されている種はそれぞれ以下の通りである。

環境庁レッドデータブック

[絶滅危惧ⅠB類 (EN)] : アツモリソウ

[絶滅危惧Ⅱ類 (VU)] : キキョウ、キンセイラン、カザグルマ、クマガイソウ、コアツモリソウ、サギソウ、ノウルシ、ミズアオイ、ユウシュンラン

[準絶滅危惧 (NT)] : ヒメシャガ

宮城県レッドデータブック

[絶滅危惧Ⅰ類 (CR + EN)] : アツモリソウ、イチリンソウ、カヤラン、キキョウ、キンセイラン、キンラン、クマガイソウ、コアツモリソウ、コケリンドウ、サギソウ、ヒメノヤガラ

[絶滅危惧Ⅱ類 (VU)] : アオフトバラン、アズマギク、イワウチワ、エブズズラン、カキラン、カザグルマ、カシワバハグマ、キケマン、キンラン、ギンラン、クリンソウ、コオニタビラコ、コオニユリ、ササバギンラン、サワギキョウ、ノビネチドリ、フモトスミレ、ミズアオイ、ミヤマヨメナ、ヤシャゼンマイ、ヤナギラン、ユウシュンラン、ルリソウ

[準絶滅危惧 (NT)] : アヤメ、オミナエシ、ソヨゴ、トウゴクミツバツツジ、ヒメシャガ、ヤシャゼンマイ、ヒツジグサ、ヒメコヌカグサ、メグスリノキ、リンドウ、レンブクソウ

[情報不足 (DD)] : カラスウリ

[要注目種] : アブラツツジ、ウマノスズクサ、オトコヨウゾメ、カジイチゴ、キチジョウソウ、スズラン、テリハノイバラ、ノウルシ、ヒメコヌカグサ、ヒロハコンロンソウ、フクオウソウ、ヤブムラサキ、ユキヤナギ

4. おわりに

青葉山市有林は、植物相の多種・多様さがその大きな特徴となっている。その主因は、土壌の多様さと地形の複雑さと考えられているが、その上に、急峻な崖地が人々の侵入を拒み、その反対に、奥羽山系から繋がる緑の回廊 (コリドー) が昆虫や野鳥、野生動物の往来を可能にし、種子や花粉の伝播を促し、それが植物相を益々豊かなものにしてきたものと思われる。そしてそのことが、数多くの腐生植物 (ギンリョウソウ、シヤクジョウソウ、ムヨウラン、ホクリクムヨウラン、オニノヤガラ、ヒメノヤガラ、ツチアケビなど) の発生を促し、カザグルマやラン科植物を中心とした多くの希少種 (上述) を守り育ててきたのではないだろうか。100万都市のほぼ中心部に位置しながら、他に類を見ない豊かな森・青葉山を奇跡的に存続しえた大きな要因が、生態系の広がりや連続性であったことは明白であろう。

「東北大学移転」や「地下鉄東西線」、「都市計画道路」による「開発」が断行され、青葉山の緑地=生態系が大きく分断されることは、種の地域的絶滅を意味する。カモシカなどは往来が阻止され、食物連鎖の頂点に立つオオタカやテンなどの猛禽や獣達も、狩場などの生活圏を奪われ、次第に消滅して行くことであろう。そして、バランスを失った生態系は、ノネズミやカラス類の増加を促し、植生を大きく攪乱する可能性がある。野鳥や昆虫類の往来も激減し、分断された緑地の植物相は劣化する可能性が高い。とりわけ、国指定特別天然記念物に指定されている東北大学植物園の自然生態学的価値は、極端に低下することであろう。もちろん、この青葉山市有林も例外ではない。

カザグルマやヒメシャガなどに象徴される、青葉山の豊かな植生、そして自然が、後世にいつまでも引き継がれることを心から願うものである。

謝 辞

これまで青葉山市有林の生物相調査を継続することができたのは、青葉山の緑を守る会 (植村千枝会長) のメンバーや宮城教育大学環境教育実践研究センターの学生・スタッフの協力があったからこそである。また、青葉の森管理センターをはじめとする関係機関の

皆様には諸種の便宜をはかっていただいた。この場をお借りして心からお礼申し上げたい。

引用文献

伊沢紘生，1998．EECプロジェクト研究「仙台市内広

瀬川及び名取川流域でのSNC構想の実践」．宮城教育大学環境教育研究紀要，1:63-70．

長島康雄・生方正俊・蜂須賀克明，1991．青葉山の雑木林Ⅱ青葉山市有林の植物相．東北植物研究，7:23-32．